

自閉症症状に関する研究 (II)

——二年間における自閉症状の変化——

眞 田 英 進

A Study of Autistic States (II)

——The Change of Autistic States during Two Years——

Tsunenobu SANADA

問 題

前報告 (眞田 1983)⁴⁾ において、自閉症症状の検討を重症心身障害との比較から試みた。

問題提起の要点は以下のものであった。従来、自閉症症状は健常児との比較過程において、その発達像の乖離として把握されることが専らであった。しかし、末だに吟味の余地が存在する観点から、すなわち、障害群との比較によって症状を再考しよう。というものであった。

結果は健常群との比較で明らかにされている症状の多くを概ね確認していた。しかし、若干の点で従来の所見を支持できなかった。たとえば、「視線合致困難」などの症状は自閉群よりも重心群に該当していた。

自閉症症状に関する検討第2報告として、本小論では、自閉症状の経年的変化に興味を向けている。すでに、諸家の報告は、自閉症状が発達に伴って変化する事実を、臨床的に認め、論考している。

発達に伴う変化に関与する最大動因として、

現時点では、暦年齢が有力視されているところである (中根 1983)⁶⁾。

また、症状の変化を類型化によって把握し、それぞれを比較検討する試みもみられる。

名和 (1979)⁷⁾ は52ケースの症状経過を観察して、対人関係、言語、知能の側面からみて次のような3群に分け比較検討している。

それらは、対人関係樹立の困難な群 (本体群)、ある時点より言語発達が進み、知的な発達もみられるような群、そして、対人関係の改善は認められるものの、重度知能障害及び言語発達遅滞のある (autistic mental retardation) 群である。

尾村を代表とする厚生省心身障害研究班 (尾村 1980)¹⁾ によれば、発達経過による状態像の変化を次のように類型化している。まず、全体的に発達を認めるが、知能発達に比べて情緒発達が悪い (A群)、情緒発達が良好であるのに対比して、知能・言語発達が悪い (B群)、そして、全般的に正常に近づく (C群) となっている。これら3群は態様型に相違があるものの、総じて症状の軽減化、正常化といった良転方向にあるものと解して

よからう。ところで、報告では、悪転群の存在の指摘もされている。それは、1才半～2才半の時期より言語消失、無表情化などがみられ、発達に明確な限界があるような、いわゆる（折れ線）経過をとる一群である。

若林 (1983)³⁾ は、折れ線型 (Knick. Typ.) の命名者が石井高明であると明言しつつ、極めて早期において退行現象が顕れ、そのまま発達が遅滞する類型群を確認し、正常群との比較研究を行っている。

本小論では上述の諸検討の継承を意図するものではない。むしろ、それらを溯り、問題を出発点に戻し、症状における変化のてんに視座を置く。第1報において検討された自閉症状が、二年を経過した現時点でいかなる態様の変化を示しているか、といった疑問を検討することが今報告におけるテーマである。

方 法

●対象 第1回調査 (1981年8月) において対象となった子ども37名のうち、下記による調査で有効であった21名が今報告の対象である。これらの子どもの C.A. は6才11ヶ月～19才5ヶ月 (平均 C.A. 12才6ヶ月) であった (1983年8月末日現在)。21名中男子19名、女子2名であった。いずれの対象児の保護者も佐賀県自閉症児親の会「ひまわり会」に属している。

●手続き 調査は、戸別訪問形式 (面接) によって行われた。使用された調査項目表は第一報における内容と同様である (眞田・前報告の巻末資料参照)⁴⁾。なお、調査には筆者の卒研指導学生3名が参加している。

●データ整理にあたり、前回と今回を通じて

症状項目に対する該当度数が極めて低いものは除外することにした。あるいは、前回使用された症状項目を、より適当なカテゴリーに組み換える試みを行い、若干の修正をみた。整理された症状項目は、後出の図1～5に明らかにされるとおりである。

分析検討の中心は、二回の調査結果としての症状に該当する度数比較におかれている。変化に対する統計的な有意性の検定には、McNemar, Q. の方法⁵⁾ が用いられた。

結 果 と 考 察

「言語」「対人関係」「遊び・関心」「感覚・知覚」「行動」の5つのカテゴリーに、自閉症症状の項目が括られている。

図1～図5において、両調査結果が表わされている。以下カテゴリーごとに言及してゆきたい。

「言語」に関する症状について

●発語、奇声、会話、ことばの理解についての症状項目の該当度数が図1に示される。

●(発語) 両調査を比較すると、項目「全く発語なし」を除く全ての項目において、'83年結果の方が高頻度をみせているようである。この中で、有意差が認められるのは「反響言語がある」の1項目のみである。この項目について、二年間の変化を検定したのが、表1に示されている。この表を見ると、'81年に症状に該当するものが3名に過ぎなかったのに、'83年には新たに9名が該当し、合計12名に増加していることがわかる ($\chi^2=7.111$, $df=1$, $p<.01$)。

●(奇声) 調査間に特徴的变化は認められないようである。

(会話) 項目「全くできない」が減少して、「少しならできるが奇妙」、「ほぼ正常な会話ができる」などが増加しているように思える。しかし、いずれの変化も有意レベルに至っていない。

(ことばの理解) 項目「かなり理解できる」が10名から15名に増加している。この変化を表2において検討してみる。有意水準は

10%であった。「簡単なことばの理解」は減少(有意)し、かなり理解できる程度に変化しているかのごとく読みとれる。

言語に関する症状の変化をまとめてみたい。

ことばの理解は「簡単なことばの理解」から「かなり理解できる」程度への移向がうかがわれる。「拒否を表すことばが使える」の増加は、より主体的言語使用の兆しを予測させる。

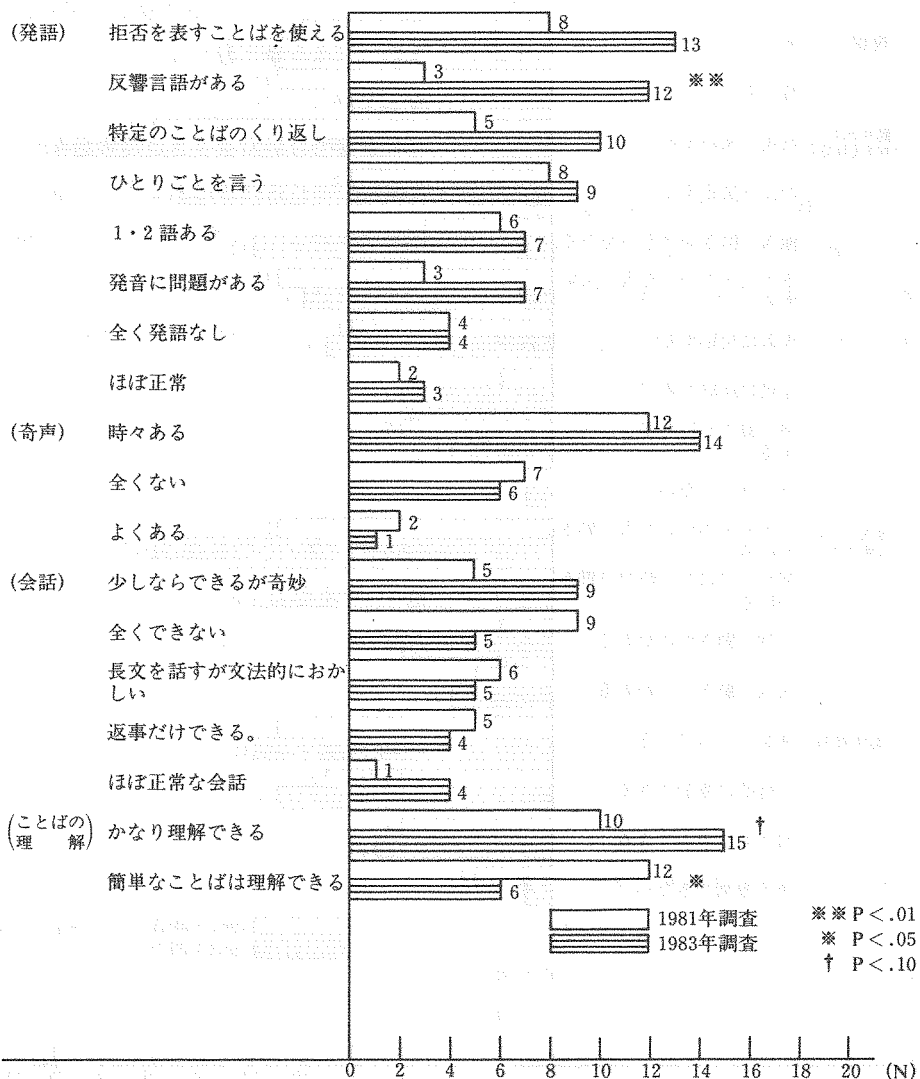


図1 「言語」に関する症状

表1 症状(反響言語がある)の変化

○:該当する ×:該当しない

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	9	9	18
○	3	0	3
	12	9	21

$$\chi^2=7.111 \quad df=1 \quad p<.01$$

表2 症状(ことばの理解がかなりできる)の変化

○:該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	5	6	11
○	10	0	10
	15	6	21

$$\chi^2=3.200 \quad df=1 \quad p<.10$$

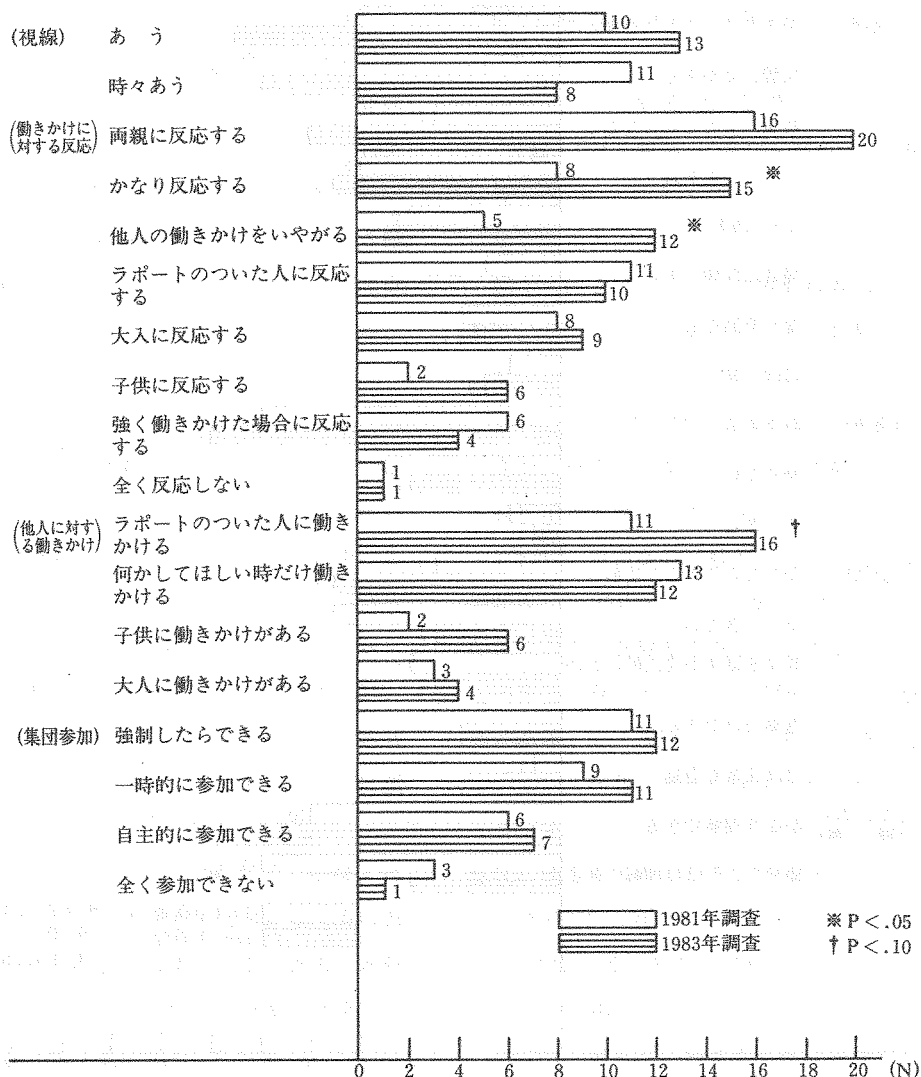


図2 「対人関係」に関する症状

さて、有意な増加をみた「反響言語」をいかに解釈したらよいであろうか。この結果をもって、より自閉的言語症状に傾斜してゆく変化と捉えるには無理がある。何故なら、上述のように、言語全般を概観した場合、良転傾向が否めないからである。従って、これは、無言語的段階から有言語初段階への移行的变化として解釈できるのではないかと推測する。

「対人関係」に関する症状について

対人関係では、視線合致、働きかけに対する子どもの反応、子どもから他人に対する働きかけ、集団参加などの症状項目が設定されている。結果は図2に示されるとおりである。

(視線) 項目「視線があう」と答えている人数が10名から13名に増えている。しかし、この増加は有意レベルには至っていない。

(働きかけに対する子どもの反応)

「両親に反応する」「(知らない) 大人に反応する」「子供に反応する」などの項目に増加がみられる。そして「かなり反応する」は顕著な上昇 ($p < .05$) を示している。これを、表3において検討してみる(表3参照)。項目該当者が前回8名に加えて7名の増加をみていることがわかる。

表3 症状(働きかけにかなり反応する)の変化
○: 該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	7	6	13
○	8	0	8
	15	6	21

$$\chi^2 = 5.143 \quad df = 1 \quad p < .05$$

ところで、項目「他人の働きかけをいやがる」も急増している。表4に表わされるとおり、この変化には5%水準の有意性を認める。

表4 症状(他人からの働きかけをいやがる)の変化
○: 該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	8	8	16
○	4	1	5
	12	9	21

$$\chi^2 = 4.00 \quad df = 1 \quad p < .05$$

(子どもから他人に対する働きかけ)

項目「ラポートのついた人に働きかける」の増加がみられる。表5においてこの変化を検討すると、この変化は10%水準の有意レベルにあることがわかる。

表5 症状(ラポートのついた人に働きかける)の変化
○: 該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	5	5	10
○	11	0	11
	16	5	21

$$\chi^2 = 3.2 \quad df = 1 \quad p < .10$$

また、有意水準は低いものの、自閉児に欠如する傾向があると考えられる「子どもへの働きかけ」に増加の兆候がみられる(表6参照)。

(集団参加) 項目「全くできない」は減少している。さらに「強制したら」「一時的に」

表6 症状(子供に働きかけがある)の変化
○:該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	4	15	19
○	2	0	2
	6	15	21

$$\chi^2=2.25 \quad df=1 \quad p<.20$$

「自主的に」など、参加方向の項目への頻度が高まっている。

以上の対人関係症状についてまとめる。

視線は「あう」方向に、「対人的反応」「働きかけ」、あるいは、「集団参加」傾向の増加がみられた。いずれも良転方化への変化と考えてよからう。

ところで、一見、以上の傾向に相反するようにみえる項目「他人の働きかけをいやがる」が有意な増加をみている。このてんに言及してみたい。この項目は、自閉症状が、一面では、過敏性を基礎とした過敏反応あるいは対人回避反応を基礎として形成される。という知見(小林 1980-a, 1980-b)²⁾³⁾ に関するものである。本結果では、項目全般に対人的反応の増加傾向を認めている。しかしなが

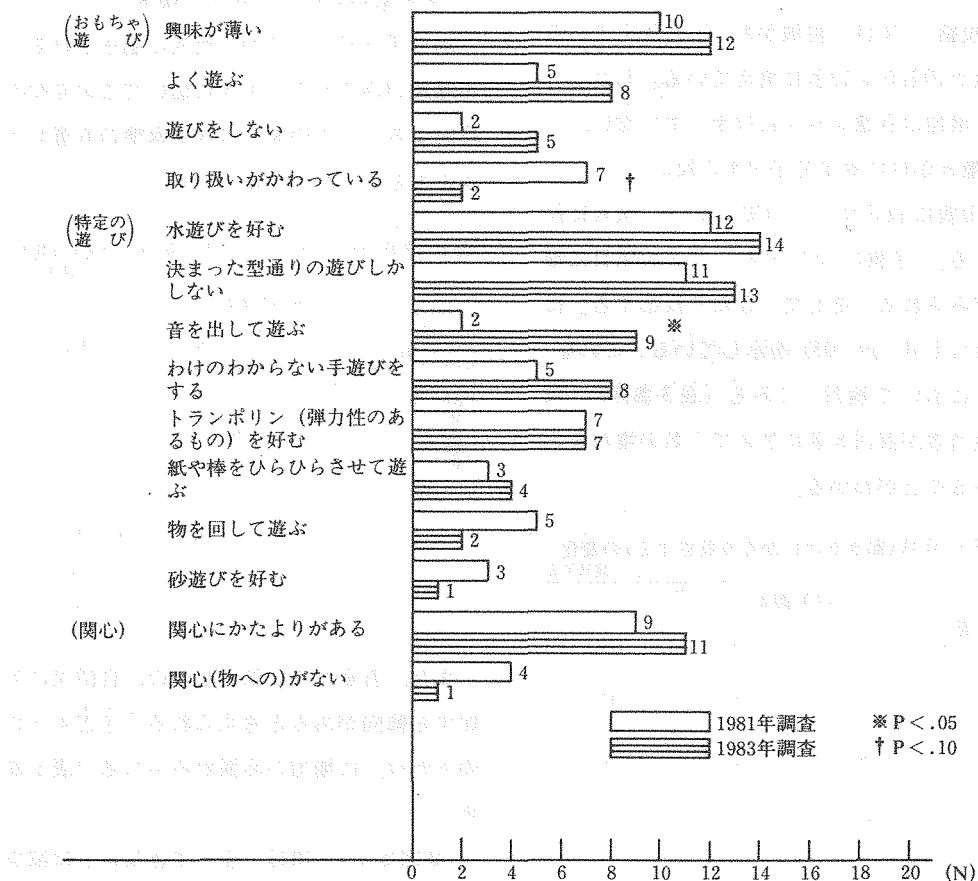


図3 「遊び・関心」に関する症状

ら、「回避の傾向」の増加も否定できない。対人的接近方向の変化の中に、対人回避傾向をも共存させていると解釈する他はないようである。

対人的接近（正）反応性の中に回避（負）反応性を含有するとの予測はすでに前報告において（眞田 1983）⁴⁾ ふれられていた。

ともあれ、自閉の1つの基本的症状である対人関係障害の軽減傾向は認められ得る。

（遊び）項目「おもちゃの取り扱いがかわっている」が減少している（表7参照）。

表7 症状(おもちゃの取扱いがかわっている)の変化
○：該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	0	14	14
○	2	5	7
	2	19	21

$$\chi^2=3.20 \quad df=1 \quad p<.10$$

「遊び・関心」に関する症状について

遊び・関心に関する症状についての両調査結果を図3に示す。

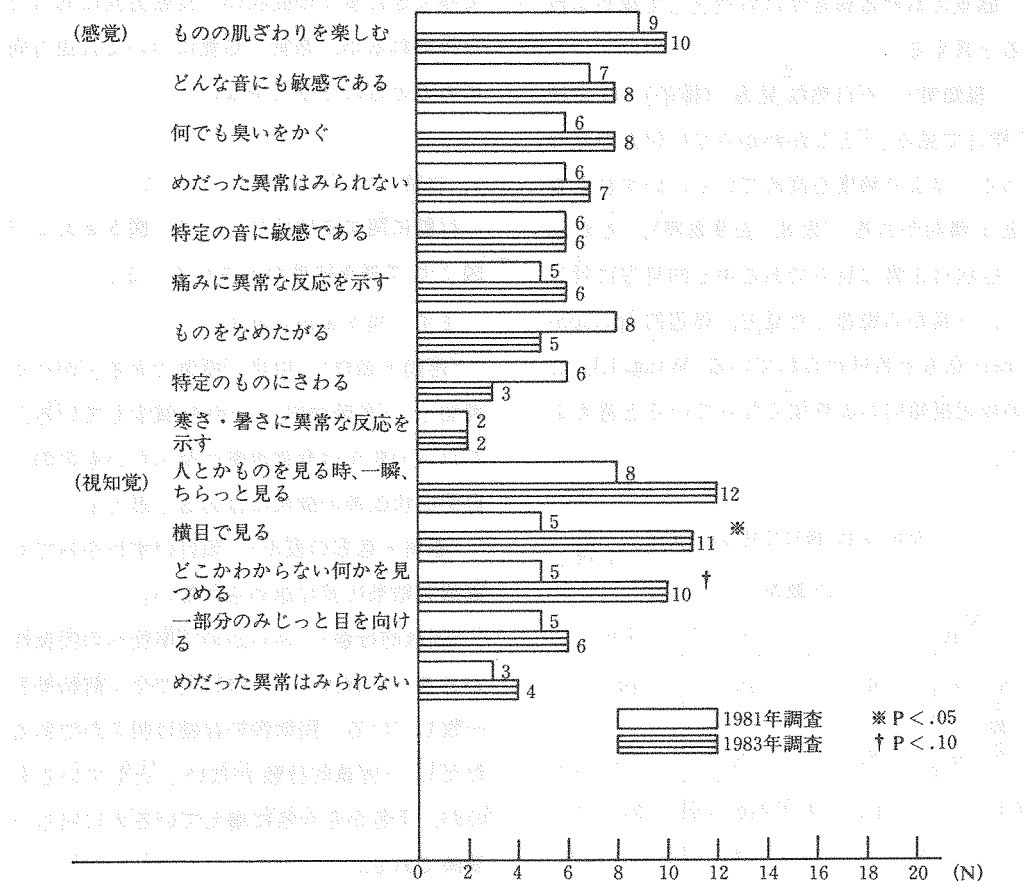


図4 「感覚・知覚」に関する症状

項目「音を出して遊ぶ」の頻度が有意に高くなっている。遊び活動の活発化を反映する傾向のようにも思われるところである。

(関心) 項目「関心がない」はやや減少しているものの、依然として「関心にかたよりがある」傾向は続いている。

「感覚・知覚」に関する症状について

図4に感覚・知覚に関する症状項目の結果が示されている。

(感覚) 諸項目「音に対して敏感である」「肌ざわりを楽しむ」「何でも臭いをかぐ」などにおいて有意な度数変化はみられない。

感覚における異常性は依然として認められると言える。

(視知覚) 不自然な見方(様子)の症状「横目で見える」「どこかわからない何かを見つめる」はより頻度を高めている。いずれも有意な傾向がある(表8, 表9参照)。これらの症状は正常な見方である中心的見方に対して、正常から脱逸した見方、周辺的(peripheral)見方と名付けられている(Wing, L)。この周辺視傾向がより強くなっていると言える。

表8 症状(横目で見える)の変化

○: 該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	6	10	16
調査 ○	5	0	5
	11	10	21

$$\chi^2 = 4.167 \quad df = 1 \quad p < .05$$

表9 症状(どこかわからない何かを見つめる)の変化
○: 該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	7	9	16
調査 ○	3	2	5
	10	11	21

$$\chi^2 = 2.778 \quad df = 1 \quad p < .10$$

以上をまとめてみる。感覚における異常性、知覚(見る様子)における特異性は、いずれも存続、あるいは、傾向を強めていた。今までみてきた多くの症状が、良転方向にあったと思われるが、感覚・知覚については逆方向にあると言わざるを得ない。

「行動」に関する症状について

行動に関する症状について、図5-aおよび図5-bに調査結果が示されている。

まず、図5-aからみる。

(運動・動作) 項目「模倣できる」がやや増加し、「多動傾向」がやや減少している、これらの変化は有意水準に至らないものの、自閉症状改善の徴候にはあると思える。

(感覚・意志の表出) 項目いずれをみても、両調査結果に差は認められない。

(固執的行動) 何らかの「事物への固執性がある」に該当したのは12名で全く前結果と一致している。固執性の存続は明らかである。ただし、「固執的行動がない」としているものが、2名から6名に増えているのは明るい徴候である。

次に、図5-bをみる。

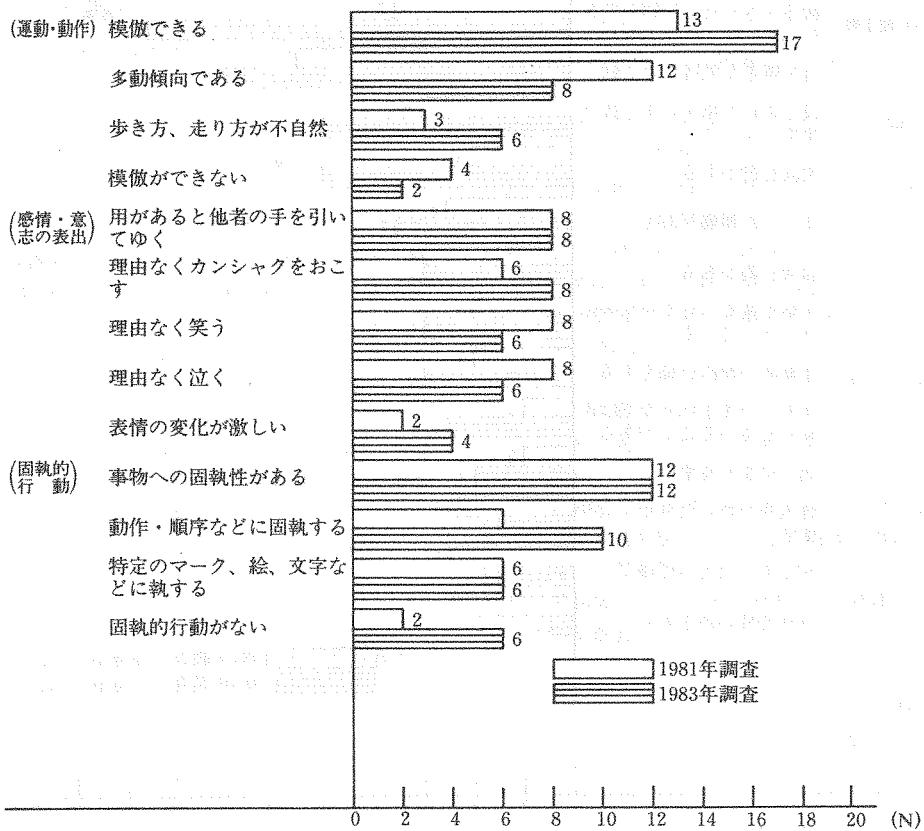


図 5-a 「行動」に関する症状

(行動全般) 1983年調査における高頻度項目順で図が作成されている。上位項目において両調査結果に差が認められていることがわかる。

項目「融通をきかせた行動ができない」は7名から17名と急増している。表10において、この変化の状態を表わしてみると明らかに有意な差があると言える。

あるいは、項目「常同行動がある」も有意に(5%水準)に増加していることがわかる。

中・下位項目では、有意な差(変化)は認められていない。

融通をきかせた行動の困難は、自閉の基本

表10 症状(融通をきかせた行動ができない)の変化

○: 該当する

症 状	'83年調査		Tot.
	○	×	
'81年調査 ×	11	3	14
○	6	1	7
	17	4	21

$$\chi^2 = 7.364 \quad df = 1 \quad p < .01$$

的障害としての適応行動の障害を反映するものである。他の基本的障害として、対人関係、言語の問題等があげられるが、これらについてみれば、本結果が示しているように、良転

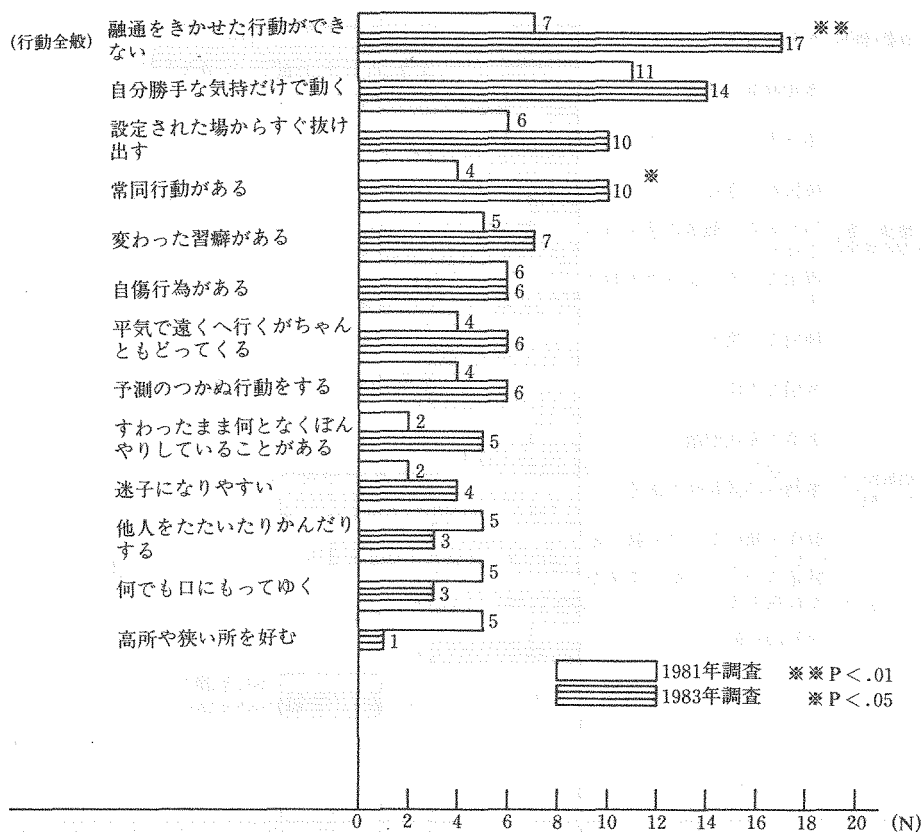


図 5-b 「行動」に関する症状

方向の変化が認められる。しかし、適応行動については同様の変化は期待できず、適応行動要因は自閉の中核に深く関与しているかのような印象を持たされる。

要 約

自閉症症状について、二年間（1981年～1983年）における変化が検討された。結果は以下のように要約される。

① 言語に関する症状の変化

ことばの理解、会話などに改善（良転）傾向がみられた。反響言語に増加がみられたが、無言語段階から有言語段階への移行傾向の増加として解釈された。

② 対人関係症状の変化

視線合致、他者への反応、他者への働きかけ、集団参加など、全般的に良転傾向が認められた。

③ 遊び・関心に関する症状の変化

おもちゃ等の取り扱いなどにみられる特異性は減少傾向にある。しかし、関心のかたよりは変化していない。

④ 感覚・知覚症状の変化

感覚の異常性は存続している。さらに、知覚（見る様子）の特異性は傾向を強めていた。

⑤ 行動に関する症状の変化

模倣能力に改善の兆しを認めるものの、全般行動項目の「融通をきかせた行動（適応的

行動)」が困難な傾向はより強まっていた。

適応的行動を改善することの困難性が再認識された。

附 記

はじめに、今回の戸別訪問面接に御協力いただいた保護者の皆様方に衷心より感謝致します。面接時間が延々3時間に及ぶ御家庭もあり、多大な迷惑をおかけした。お詫び申し上げます。おわりに、今報告には、初報におけると同じく、新たに3名の卒研指導学生が参加している。諸君の名前を以下に明記して、ともに労をねぎらいたい。

秋山由美子 (80 p-501, 現・佐賀県教員), 中元寺まり (80 p-511, 現・佐賀県教員), 尼寺春美 (80 p-514, 現・佐賀県教員)。

引用文献

1) 尾村偉久 (代表) 厚生省心身障害 研究班

1980 発達経過による自閉症臨床像の素描—「自閉症」診断のための手引 (試案)—昭和53年度報告 発達障害研究 第2巻 第1号 60-72.

- 2) 小林重雄 1980-a 自閉症児—その臨床例と技法— 川島書店.
- 3) 小林重雄 1980-b 自閉症 その治療教育システム 岩崎学術出版社.
- 4) 眞田英進 1983 自閉症症状に関する研究—自閉症と重症心身障害の比較を中心に— 佐賀大学教育学部研究論文集 第31集 第1号 (II) 251-264.
- 5) 祐宗省三・他 1975 教育心理統計法要説 明治図書出版.
- 6) 中根 晃 1983 自閉症の臨床—その治療と教育— 岩崎学術出版社.
- 7) 名和顕子 1979 自閉症の病態に関する研究 児童精神医学とその近接領域 第20巻 第4号 214-238.
- 8) 若林愼一郎 1983 自閉症児の発達 岩崎学術出版社.

(昭和 59 年 9 月 26 日受理)